

〈本論第四回：内乱なき自動機械としての国家〉

参考文献

※トマス・ホブズ『リヴァイアサン』水田洋他訳、河出書房新社、1974（原書初版は1651年）

アトム化された個我と、集権的かつ人為的近代国家の対極性を考える場合、国家が自動的に発生したわけでもなく、また下部構造の大変革、たとえば本格的マニュファクチュアの開始がそのまま国家の集権制を規定したのではないという直感を持つことが大切である。つまりここでも下部構造と上部構造は相互規定的なのだが、第三の項として個我の主体性、その近代的定位の革新性が参加してくる。つまり近代国家のマスとしての巨大さはたしかに機械情報革命前夜の生産と物流の拡充を反照しているものの、その構造の実際、つまり人為的合理性を決定するのは、一見まったく無力にすら見える個我の内的変革なのである。これはマルクスの経済決定論を〈修正〉するといった枝葉末節の論理ではなく、第二革命と人間の関係そのものに規定された真実である。この個我と国家の弁証法は、日本的近代においてもほぼ同じ力学で繰り返されていることを確認すれば（この検証は第五章で行う）、ここにもまた源泉と淵源の重合および偏差を認めることができる。

すでに近代的定位の自己展開、その構造化の力は確認されつつある。アトムの個我はまず即自的に（素朴事実に）ルネサンス期の人文主義運動で用意された。その個我はまた国家の人為性の最初の実験を行った主体でもある。ついでデカルト的個我（コギト）の強い対自性は、方法の自覚を生み、その方法の活用がつまりは近代的合理主義の最初の展開でもあった。それは官僚制度と軍制の合理主義的編成によって、近代的集権に大きく寄与することになる。肥大していく国家に対し、ますます孤立していく個我相互の〈恐怖〉と無政府状態（という自然状態）が確認された時、合理主義は新たな展開を見せ、〈契約〉による集権の合理的成立と展開という、近代固有の国家論が生まれる。もちろんトマス・ホブズ（1599～1679）がその創始者である。

あらかじめここで、日本的個我とその萌芽的合理性が、ホブズのような機械的国家観を生んだかどうかを考えておくと、再び淵源と根源の偏差を図れるかもしれない。まず機械的国家観は、アトム化された個我の「観念における」新たな共同性の模索であると一般化すれば、それは近代的定位のシンタクスに内包されることが確認できる。個我と共同性の二律背反の中で、マクロの時代区分は推移するが、近代の場合、それは強いアトム化と、共同性構築の人為性へと両極化していくからである。したがってルネサンスの小邦におけ

る専制君主たちが著しく人為的、人工的な、その意味で限定的に合理的な国家をプランニングし、まがりなりにもそれがしばらくの間は（それは多くの場合短命ではあったが）現実に存続しえたことは、やはりホッブズ的な自動機械としての国家の祖型であったと考えることができる。実験的専制国家は、一方では本格的な絶対主義国家の先駆けとなり、他方では個我の観念における（ホッブズの机上における）理論的、機械的国家観へと収斂していく。

ここまで概念化を進めてみると、やはりこの合理的、機械論的過程の全体が、幕藩体制の特異な人為性によって阻害されただろうという直感を持つことができると思う。そしてそれは実際にそうであったことが確認できる。

問題は人為性の質である。ルネサンスの専制君主、それを引き継いだ本格的絶対制における君主たち、またデカルトからホッブズに至る機械論者たちにおいては、人為性はアトム的個我の現実感覚に裏打ちされた人工性、合理性だった。したがってそれは自動的な機械という国家観念に帰結する。それに対し幕藩体制の人為性は、集権的封建というハイブリッドな政体、本来の社会進化からは生まれぬはずの化石化した（化石化しようとする）、その体制の人為性であり、個我と合理性にではなく、イデオロギーと身分制によって補強されている、そういう政体の人為性である。中核部にあるのは農本的ストップモーションとでも言うべき制度の固定であって、合理性の逆側の固執、つまり現実の捨象（最大の捨象としての進展する貨幣経済の捨象）という、自らの視界の暗黒化（したがって蒙昧化）と表裏一体になっていた。

この固着と固執から、特異な観念的制度構築への志向が生まれる。それがつまりは荻生徂徠の古学における（古文辞学における）、〈聖人の治〉への遡行、本居宣長の国学における〈王土〉の憧憬と礼賛であった。その定位内実は以下で見るが（第二章第二節および第三節）、あらかじめ総括しておけば、それは江戸的専制への完全な因循同化を前提としており、彼らの観念世界そのものが鎖国され、化石化し、固着している（イデオロギー的な固着）が確認できる。つまりそれは机上の空論であり、観念的国家モデル創出のモメントは十分に内在させているのだが、その方向は近代ではなく、古代、あるいは上古なのである（再び〈王政復古〉との近親性が垣間見える）。そこには生まれつつある近代の個我と、その個我の描く機械論的共同性の再編といった本質的モメントは皆無である。

したがって結論として言えば、デカルト的合理主義が日本近世において萌芽的であった以上に、主体的、機械論的、合理的国家構築の試行は、江戸期にはほぼ皆無であった。唯一、蘭学における経世的献策がその文脈上にあるが、彼らが行ったのはモデル構築ではなく、現存する幕藩体制の〈補正〉、あるいは〈是正〉にとどまる。そしてそれすら二度の大弾圧により（〈蛮社の獄〉および〈安政の大獄〉）、壊滅的な結果を招いたのだった。

これも近代的定位のいくつかの局面について言えることだが、西洋においてプロト・近代期（ルネサンスからバロック、そして啓蒙期）に伸張した個我の定位内実は、日本では近代化そのものの中で急速な展開を見せることがある。この国家の機械的創出のモデルもそうで、たとえば北一輝の〈純正社会主義〉は、すでに十九世紀的政経のシンタクスを合成しながらだが、やはりある面でホッブズ的な観念性、合理性（かなり極端な）を備えていることが確認できる。あるいは、これはかなり歴史の闇の部分に属するが、〈満州国〉

の実体を担った官僚たちの国家経営には、当時成功が喧伝されていたソ連の〈五カ年計画〉が参照対象として用いられたことが知られており、その援用の実際は全体像の把握がかなり困難であるものの、やはり独自の合理性（国家的合理性）の追究であり、また非常に強権的であったという意味において、ホッブズの試行の末裔の一つを見ることも可能かもしれない。

いずれにせよしかし、それらは末裔であり、変種であった。近代的個我の観念的国家創出としては、やはりホッブズに尽きるところがある。したがって以下ではまずその実相に集中して検討してみることにしよう。

ホッブズは貧しいイギリス国教会の牧師として生まれ、地元の学校教育で頭角をあらわし、パトロンを得てオクスフォード大学に学び、修士号をとった。専攻はスコラ哲学と自然学であり、これは同時代人のデカルトやメルセンヌが受けた、イエズス会のエリート校での教育と似ている。それは中世的イデオロギーと近代的実学の結合であり、宗教戦争以降の復古反動期におけるエリートの常態だったといえそうである。これはたとえば明治国家が強権化していく過程で、しだいに神がかっていく〈国学〉イデオロギーと、洋学系の実学が連結されていったことを考えれば、先進的、あるいは開明的強権下の〈教育〉の一つの型と言えるような気もする。

このことを最初にちょっと注意しておきたいのは、ホッブズの、言葉の本来の意味において、神がかった強権国家〈リヴァイアサン〉と、精緻透明と称したくなる合理主義の結合は、この時代の教育、そして時代のイデオロギー一般が欲した〈知性〉のありかたと不可分な関係にあるからである。そしてこの点からして、その〈実学〉の位置、意味、さらにわれわれにとってのある種の教訓を引き出すことも可能に思う。それは一言で言って、機械論的な社会工学の位置づけをめぐっている。

ホッブズのキャリアにもどると、彼はオクスフォード大で〈御学友〉の知己を得て、貴頭の仲間入りをする。伯爵家の子弟と同学になり、頭脳の鋭敏さを気に入られてチューターをつとめるようになり、そのまま秘書兼コンパニオン（教養旅行の）となった。そしてこの縁で、パリに亡命したチャールズ二世の家庭教師となる。このキャリアは、ルネサンス期の無産階層出自のインテリを彷彿とさせるところがある。

彼らも〈頭脳と一芸〉で、いまだ強固な階級格差社会であった小国の階梯をかけあがっていったのだが、その最終型はしばしば、〈貴頭のとりまき〉だった。フィチーノしかり、ボッカッチオしかり、ペトラルカしかり。破産した銀行業者の息子ミケランジェロも、公証人の私生児だったダヴィンチも、同じカテゴリーに属する。この伝統は技師に生まれ、貴頭のあいだを渡り歩いたベンヴェヌート・チェリーニ（1500～1571）のころまで確認できる。近代の大学制度が北方でも整備されていくと、このホッブズのような貧家の子弟も、才覚と運さえあれば、国王の側近にちかいところまで登りつめることができたのだった。

このキャリアが汎ヨーロッパ的であったこと、そしてそのルーツはイタリア・ルネサンスにあったことは、ホッブズの人格形成のみならず、その〈知性〉の質を考える場合、とても大切な背景だと思う。つまり彼は、典型的な〈セルフ・メイド・マン〉であり、〈み

ずからの裡に尺度をもった〉合理主義者だったということである。しかしすぐに言うておかねばならないのは、その側近的ステータスはまた、非常に不安定な〈相互是認〉にもとづくものであったから、悪くすると、〈下男・下僕〉の位置（家庭教師とはつまりそういう相場ではあった）に落とされるかもしれない。それがまたお互いに（貴頭と彼に）わかっている、そういう〈上昇〉であったということ。つまり、ルネサンス人がそうであったように、彼もまた、〈人生の浮沈〉につねにさらされ、その中で、〈名声と才覚〉のみを頼りに生きていたということである。つまり彼は、日常生活の次元で専制の恣意性を熟知していた。わかるように、このことは、〈強権の合理性〉を説いた、この主著の私的、現実的背景として、やはり相当に意味があるのではないかと思う。

ホブズはイギリス国教会、つまり〈新教〉の側で人となったが、その教育、教養背景は大陸のデカルト、メルセンヌといった同時代人とほぼ同じだったことは上に述べた。もう一つ両者に共通する傾向は、ルネサンスの人文主義の否定である。これは『リヴァイアサン』のおしまい近くに出てくる、〈暗黒の王国について〉の章で、ほとんどプロパガンダ的に展開されており、そこでは〈ルネサンスの鬼神学〉（つまりヘルメティズム）や、アリストテレスの模倣神学（つまり自身が学んだスコラ哲学）までもが、〈靈的暗黒〉をつくりだした、と断罪される。背景をなす歴史的なコンテクストに翻訳すれば、ルネサンスがあったからキリスト教が乱れ、宗教戦争、そして目下の清教徒革命による内乱が起きた、という主張になる。そしてもちろん〈リヴァイアサン〉は、その内乱抑止に対する万能薬となるはずの国家理論であった。

しかし面白いことに、ホブズはルネサンス的人文主義を否定したにもかかわらず、古典語が非常に好きで、古典作家に通暁していた。オクスフォード大学に進学できることがわかると、手すさびに、エウリピデースの〈メディア〉をラテン語に訳したりしている。そしてとうとう一冊の枕頭の書を見つけた。ツキジデスの『戦史』である。この古代の内乱世界に没頭した彼は、ついにギリシア語原典から、母国語英語に翻訳し、出版している（1629年初版）。これは〈リヴァイアサン〉にも大きな影響を与えた。その影響の本質を一言で言えば、内乱状態の中核に、〈社会的情念〉をおいたことだと要約できるだろう。

これはかなり重要なポイントなので、少しだけ立ち止まってみよう。

まずツキジデスだが、ペロポネソス戦争前夜、アテーナイの海上帝国と、スパルタの陸上帝国にギリシア中が二分されていく状況を見て、自分はこの戦史の記録を残すことを決心したと開陳する。そしてその勢力分岐の真の動因は〈恐怖〉であったと直截に総括している。

〈この大戦の真の動因は、一般におこなわれている説明によっては、捕捉されがたい性質をもつ。あえて筆者の意見を述べさせていただくと、アテーナイ人の勢力が増大し、ラケダイモン人（スパルタ人）に恐怖をあたえたので、やむなくラケダイモン人は開戦にふみきったのである。〉（ツキジデス『戦史』第一巻24）

アテナイを開戦、そして籠城に向けて〈指導〉したのはペリクレスだったが、彼は市民に苦痛を強いるその作戦の遂行にあたり、こう述べている。

〈こうしてわれわれは、あらゆる資源の豊富さ、そしてその規模の壮大さにおいて、他の追随を許さぬポリスを築いた。もとより、事なかれ主義の臆病者は、これは間違いだったと言うかもしれない。だがこれこそが、おのれの志を遂げんとする者には、羨望嫉視やみがたい手本であり、志をもっても遂げられなかった者は、これを見て嫉妬に狂うだろう。なにびとたりと、人が人を支配しようとするれば、その支配の続くかぎりは、かならず憎悪を受け、これに過酷に報いようとする。だが大望を果たすためには、世の嫉視をもいとわぬ者こそ、志すぐれた人間の名にあたいする。なぜなら憎悪は命みじかきもの、それに対して現世界に栄光ある者は、後世名を伝え、つねに称賛の対象となる。〉(同上、第二巻65)

ペリクレスは、〈嫉妬〉と〈支配欲〉と〈栄光〉とを結びつけた。そしてアテナイ市民の賛同を得た。それが当時の社会通念にかなった、〈情念の連鎖〉だったからである。これがつまり、〈弁論術〉の段階の〈社会工学〉だった。すでに操作と機械論的なメカニズムとの連携は見られるが、〈工学〉はまだ比喩的であり、〈マシン〉は登場していない。弁論家が操作しようとするのは、大衆の、気まぐれな、熱く醒めやすい情念である。

ホブズの場合、いよいよこの〈マシン〉が比喩ぬきで登場する(したがってそれは近現代的社会工学の開始となる)。しかしまた、同じ熱く醒めやすい情念は〈人間の自然状態〉として再確認された。その要となるのは、ペリクレスも依拠した〈支配欲〉である。

〈すべての人間における、力への、やむことなき欲望：わたしは第一に、全人類の一般的性向として、次から次へと力を求め、それは死によってのみ消滅するという、尽きることも停止することもない欲望をあげる。〉(ホブズ『リヴァイアサン』、〈第一部：人間について〉、試訳)

こうした基本情念を野放しにすることから、あの〈万人の万人に対する闘争〉という、〈自然状態〉が生じることになる。そこで自由を放棄して、最低限の生存の安全を手に入れる、その結果、〈超権力〉としての強権国家が生まれる。この『リヴァイアサン』の中核テーゼにおいて注目すべきことは、ここにおいても〈情念〉が計算に入れられていることである。それは〈恐怖〉であり、〈契約の宣誓〉という、一見何でもなさそうな、形式的確認を実体的に裏打ちすることになる。

〈宣誓の目的：言葉の力は、人々に宣誓した約束の履行を守らせるには弱すぎる。人間の本性の中には、誓約の強化に役立つものは二つしか考えられない。約束を破棄したさいの結果(刑罰)についての恐怖、約束を守っていると他人にみせかける、その自慢と誇りである。……当てにできる情念はただ一つ、恐怖である。〉

これはもちろん暴力機構（警察と軍）の占有によって成立する、近代国家（民主国家も含まれることに注意）のメカニズムを念頭に置いたものだが、それを赤裸々に、〈恐怖〉をあてにしたメカニズムだと断言するところに、ホッブズの特徴がよくあらわれている。

よくあらわれているが、実は、タグづけをするのは難しい。

それはマキャヴェリズムだろうか？

ちがうようだ。冷徹な計算はあるものの、勝ち負けではなく、やはり宣誓した契約の遵守という、ある意味一般的な〈公益〉と連結されているからである。

ではそれは、〈法の精神〉の近代的表現だろうか？

どうもちがうようだ。その近代法の抛って立つ（べき）、〈自然法〉、そしてそこに内在する（すべき）基本的人権の観念が、かれの〈自然状態〉には根本的に欠如しているからである。これを注意する必要があるのは、彼の契約理論はしばしば〈自然法〉の嚆矢であるとされることがあるからである（イエリネクもその説を採る）。わたしはしかし、これは違うと思う。彼の人間観は、暗く、酷薄で、悲惨で、冷徹である。その冷徹さの中には、知性と理性の光がちらついているが、そこには〈法則〉はあっても、権利義務の意味での〈法〉は欠如しているからである。その〈法則〉は、再びデカルト的に〈計算と操作〉へと傾く。つまりそれは応用と直結する、そういう〈法則〉である。

これはつまり、〈焼け跡〉の精神だった。彼は宗教戦争を二度体験していることを忘れてはならない。本国のイギリスにおけるピューリタン革命、そして大陸における三十年戦争である。

〈焼け跡〉には共通項と、個別性がある。

われわれ、大空襲と原爆の焼け跡の子たち（その父母の心象をつぐわたしたち）は、さまざまな焼け跡を見て、そこに即座に〈仲間〉を意識する。こうしてたとえばベトナム戦争のナパーム弾がつくる焼け跡を理解したわれわれは〈ベ平連〉（ベトナムに平和を市民連合）というNPOを立ち上げた。

われわれは、史書の語る焼け跡にも敏感に反応する。

カルタゴの焼け跡、そこにローマ軍は塩をまいて、耕作を不可能にした。このディテールが、なぜかわたしのこころをかきむしる。

そして、宗教戦争の焼け跡、充実した中世末期からルネサンス期を経たばかりのドイツは、人口の20パーセントを失った。

そして清教徒革命。クロムウェルたちが、アイルランドに、そしてイングランドにつくった焼け跡。

それがつまりはホッブズの見る〈自然状態〉の原風景であること、それはわれわれも理解する。しかし理解はここまでである。その暗さ、酷薄さ、冷徹さをわれわれは根本的に理解しない。ちょうどルソーやデイドロが理解しなかったように。かれらは焼け跡はしらなかつた。しかしこの啓蒙期の人権論者には、われわれと大きな共通点があった。人間の相互是認は自然状態においても、すでにはじまっていたという直感である。つまり……自然法と基本的人権が、かれらとわたしたちを結ぶ、心性の明るさ、健康さを保証してくれている。

つまり、わたしたちも彼らの系譜、その末裔にはちがいないのだ。大空襲と原爆が、〈労働基準法〉と男女同権憲法でバランスがとれているのかはわからない。おそらくとれていないだろう。しかし〈やけあと〉と共に、ほぼ同時に、わたしたちが近代的法治と基本的人権を最終的に手にいれたこと、そのことはたしかな事実なのだ。

そのおかげでわたしは、われわれは、ホッブズの〈自然状態〉を理解しない。そしてそれでいいと感じる。

ホッブズは、亡命中の王権のすぐそばにいて（チャールズ二世の側近として）、絶対王制のフランスの貴顕（特にリシェリユー）とも近かった。『リヴァイアサン』はだから、内乱でずたずたになったイギリスにも成立すべき、強権のマニュアルのようなところがたしかにあった。じっさい、王権であれ、議会強権（クロムウェル）であれ、ホッブズにとってはどちらでもよかったようで、51年にはひそかに帰国してクロムウェルに挨拶しているし、66年に王政復古となると、パトロンの貴族とともに、凱旋したかつての教え子、チャールズ二世によしみを通じたりしている。つまり、王権であれ、清教徒強権であれ、彼にはどうでもよいことで、ともかく強い権力であれば、それでよかったのではないかと思う。彼の考える〈国家〉の、そのレゾン・デートル（存在理由）は、すべて内乱状態の抑止、つまり〈自然状態〉の克服に向けられている。そしてそのための処方箋は、〈自動機械〉だった。

国家の全体が、化け物のような一人の人、つまり〈リヴァイアサン〉のような王によって代表される、それがこの書物のイメージそのものを決定してきた。しかしもう一つの面が忘れられてきた、あるいは〈哲学史上の過去〉のように扱われてきたのではないかと思う。つまり、その化け物は〈機械〉なのである。それはホッブズによれば、人間が〈ほとんど機械〉だからだった。人間は機械である。リヴァイアサンは人間である（擬製された人間である）。ゆえに、リヴァイアサンは（も）機械である（であらねばならない）。この三段論法こそが、本書の核心部にあり、それこそが、ホッブズの〈社会工学〉の本体であるとわたしは感じる。それはその〈社会工学〉には、おそろしいアクチュアリティがあるからである。

難しいことを言っているのではない。強権と、メカニズム、最新のメカニズムとの思いがけない連結のことを言っているのである。たとえば顔認証とチェック機構の欠如した警察組織（実質の秘密警察）、AIとDNA〈資源〉の操作。強権と、サイバー戦争の連結、**etc. etc.**

ここにはたしかに、最新最大の操作メカニズムがあり、超限といたくなるメガ・マシンとしての強権国家が見え隠れする。そしてそのマシンにはどうやら普通の意味での〈血〉がかよっていない。それは、ホッブズの言う、〈自動機械〉（オートマタ）に酷似してきている。したがって、いまいちど、その原点にもどり、強権とメガ・マシンとしての国家の結びつきを検証する必要がある。

『リヴァイアサン』は次のように始まる。

〈自然とは、神が世界を創造したもうた、そして統治されておられる、その技法 (art) のことを言う。その自然という神の技は、技巧により、動物を造るわけだが、そのことは、ほかの多くの場合同様、人間の技術によっても模倣される。〉

バロックの文体は、曲折に富む。これはその代表のような一文で、いくつかの独創的、あるいは常識的テーゼ (当時のインテリの) を包含している。解析してみよう。

まず、自然は神の被造物である。これはユダヤ教以来、キリスト教も堅持する、〈創造主としての神〉のドグマである。これは常識。しかしその自然が、神の〈技〉だというのは、ホップズのオリジナル。よく言われる定型、自然は神の〈作品〉だということにはちがうことに注意しよう。〈技で、技巧をこらして動物をつくる〉という文章が続くことでわかるように、それは技術の総体である。つまり自然は動態として、神の創造の技を証し続ける。これはかなり独特な創造観である。そしてこの動態が、人間の技に連続する。

一読してすぐに二つの連関に気付く。一つはデカルトの機械論的世界観である。デカルトはそれを世界、宇宙にまで拡大した。ホップズは宇宙を論じるのではなく、自然と人間を〈技法〉によって連結する。そしてこの〈技法〉は、〈自動機械〉 (オートマタ) によって代表されるのである。その論理がまた面白い。動物は (生命は)、よく見ると、時計のような機械にすぎない。であれば、その時計のような〈オートマタ〉 (ほうっておいても自分で動く機械というほどの意味) は、〈人工的生命〉と云っていいのではないかと言うのである。これもまた非常に屈折に富むドグマであることがわかる。デカルトの動物機械論を参照しつつ、では機械そのもの、たとえば時計はどう見るべきかと自問する。動物が機械ならば、時計は自分で動いているわけだから、動物の一種と見てもいいだろうという推論が成り立つことになる。

時計はほとんど動物である。これを拡張し、極大にすると、機械である人間を模倣したオートマタ、ほうっておいても自分で動くメガ・マシンというものが浮かび上がる (思考実験の視界に見えてくる)。これが〈人工的人間〉としての〈国家〉、つまり〈リヴァイアサン〉に他ならないのである。

まずこのドグマの形から、文体から検討しよう。

こうした複雑に迂回する文体は、バロック期に典型的に見られる荘重体で、ホップズが影響を受けたそのデカルト本人も、この文体の愛好者だった (『方法叙説』の出だしの総合文もその一例)。ベンヤミンによれば、こうした曲折と迂回を好む文体は、〈神学論文〉の文体だった。こうしてまた、思いがけないところで、この二人の時代を代表する〈合理主義者〉と神学の近さを知ることになる。理性という近代的エゴの中核が輝き出すのは、中世風の、重々しい僧衣を通じてなのである (いささかベンヤミン的修辭で恐縮だが)。

そのことはまた、ホップズが提唱する〈強権〉の母胎も、実は〈教会〉だったのではないかという推測を生むことになる。遠い教父たちの教会ではない。そうではなくて、異端審問とスパイを使いこなす同時代のカトリック教会である。実際にリシュリューたちが建設中だったブルボンの絶対王制も、その点では妙に教会的な様相を呈していたらしいことが思い合わされる (そこから後世、〈三銃士〉たちの、陰謀渦巻く宮廷貴顕の伝説が生まれてくることにもなる)。ともあれ、文体に着目してみると、一つ大きな欠落に気付く。〈技〉

は神の創造した自然であり、そしてそれを模倣する人間の〈技〉だった。それは広い意味での技術である（もちろん特殊に動態的だが）。主体は神であり、客体は自然である。主語は人間であり、客語は技術であり、それを媒介として、〈人工生命〉と言ってよい、初歩的な〈オートマタ〉つまり時計のような、〈ほうっておいても動く機械〉が造られる。ここまでの論理は、紆余曲折しているものの、主語述語関係に乱れない。ところがそれが突然乱れる。

〈技術は、さらに進んで、自然のうちで、理性的でもっともすぐれた作品、すなわち人間をも模倣するに至る。〉（同上）

えっ、とおどろくのはわたしだけだろうか。そうではないと思う。技術＝手段と人間＝主体の関係がきれいに逆転しているからである。主語となった技術は比喻で、その背景に技術を使いこなす人間がいるならまだわかる。しかしそうではない。人間がすでに〈作品〉化されているからである。

この〈技術〉の独立、自走が、わたしには〈リヴァイアサン〉の謎、それが擬制なのか実体なのか、共和制なのか、専制なのかという、すでに迷宮化している謎を解く鍵ではないかと思う。そしてそれはまた、近代的国家工学の持つ、ある種の病理、業のようなものとも本質連関していると思う。工学はつまり、がんらい主体を持たないのである。その主体を持たない、自立した技術が国家を造っていく、まさにそうホップズの目には見えている。

〈技術は、コモンウェルス、あるいは国家（ラテン語でキウィタスと呼ばれた共同体）と呼ばれる、あの偉大なリヴァイアサンを創造するが、それは人工的人間に他ならない。もっともこの人工的人間は、本来の人間を保護し防衛する目的を持っているから、本来の人間よりも大きくて強い。……この政治体（リヴァイアサン）の各部分を最初に造り出し、集め、結合した、最初の契約および特記事項は、世界創造のさいに、神がのたもうた、『さあ、人間を造ろう』という、あの命令にたとえられるのである。〉（同上）

技術は巨大な人間に等しい国家を創造する。それは神が人間を創造したに等しい。つまり……^{クレアチオ・エクス・ニヒロ}無からの創造。ここでは自立した技術が、創造神と等置されている。

これほどまで直截に、〈工作人〉（ホモ・ファベル）の信仰が告白されたことはないかもしれない。機械論的世界観の極北とは、つまり機械の理性、機械の神としてふるまうことであり、これはすでにデカルトに垣間見える傾向だが、それを国家創造にまで拡大してみせたのは、完全にホップズのオリジナルである。

社会工学は、ホップズのこの机上のプランから出発して、分岐し、実体化し、近現代を通じて定向的に肥大増殖している。役所であれ、企業であれ、そこで少しでも具体的な「事務」を行おうとすれば、即座に自立したシステム、巨大なマシンの〈端末〉になったような実感を持つ。そして実際に端末コンピュータに入力していく。これがわたしたちのあり

ふれた日常であり、その背景には、隠れたメガ・マシンの影があらゆるところに射している。ちょうど〈隠れた神〉のごとくに。

社会工学はもちろん本性からして、技術であり、操作のシステムであって、それ自体、ニュートラルなものである。そしてほんらい記憶をもたない。技術とは手段であるいじょう、目的と連結される記憶、とくに社会的記憶とは範疇的に無縁だからである。技術の産品、たとえば縄文土器のような壺が社会的記憶の変遷の尺度となるのは、それが〈生活の目的〉に連結されているからであり、そこでは主体はつねに人間である。壺は客体であり、壺製作の技術は手段である。このあたりまえの、〈人間主体の〉アングルが、端末に向かうと、とたんにぼんやりしてくるのはなぜなのだろうか。

それがわたしたちの時代の、この近現代の、〈テクノロジー肥大〉の根幹の問題ではないだろうか。つまり……主体が忘却されていくのである。システムがかわって主体としてふるまいはじめる。

その原点の一つが、このホップズの国家工学に記録されているのではないかと思う。そしてここでは、神学的な深遠さと、機械論的な明晰さをともなって、その主体忘却の秘密もあかされているのではないかと思う。技術は、自立し、システムを創造する第二の神となる。第一の神が造ったもっとも複雑な機械は人間だった。第二の神が創造するもっとも複雑な機械は国家になるだろう。

そう直感してこの文章を書いた時、すでにホップズは〈われをわすれて〉いた。自立した技術が、この文章を仕上げでもしたように。AIがシステムに降臨でもしたように。

ホップズのこの強権マニュアルは、公刊直後から、賛否両論だったが、強い賞賛はつねにある社会的勢力からやってきた。権力者である。ルイ十四世は彼に年金まで与えようとしたし、トスカナ大公は著作を全部そろえ、肖像まで飾ったと伝えられている。王制の是認ではない。強権の是認が論理的に、あからさまに行われたことが、本書と権力者たちを当初から結びつけたのだと思う。

これはホップズ批判ではない。それはすぐに付け加えておかねばならない。近代国家がメガ・マシンとして登場しなければならなかったのは、その産みの苦しみ内乱だからであり、ブルクハルト風に言えば、それは世界史の必然だった。これは宗教戦争を経たヨーロッパだけでなく、戊辰戦争を経た明治国家も、南北戦争を経たリンカーンのアメリカも、みな同じ質の悲惨な近い過去を持っている。そしてそうした内乱を二度と起こさないために、領邦国家が国民国家に変容する時、その中核部が社会工学的にデザインされなければならないこと、機械論的に整合的に論理的に構築されなければならないこと、これもまた治世者だけでなく、およそ新しい国家に参加する公人の常識であった。

ビスマルク的強権は、生まれたばかりのドイツ帝国のコンセンサス、ともかくよく機能する、内乱を抑止しうる国家を創設しなければならないという、時代のコンセンサスに最終的な根拠を持っている。同じく、それを若干意識したきらいのある、大久保利通の〈有司専制〉の明治初期国家も、戊辰戦争と西南戦争を経た生まれたばかりの近代国家が絶対的に必要としたものだった。こうしたことが、近代国家成立に普遍的に見られることを、いまいちど考えてみるべきだと思う。そしてそうした初期強権が、あつというまに、ある

いは長い時間をかけて、かならず硬直化し、あるいは弛緩分裂していく、その病理の共通性をも。

つまりわれわれは、医者としての、健康体を目的とする、人間のための社会工学を必要としている。

強権構築のマニュアルは、もう常識化している。どこの強権体制も、〈リヴァイアサン〉に記されたほどの官僚組織、軍警の把握は行っている。そして、〈工作人〉もやまほどいる。なんでもこなす、おそろしく頭の回転の速い、しかしあたりまえの善悪だけは知らない能吏として。あるいは宦官的な陰謀家として。

わたしたちの時代が欲しているのは、そうした主体忘却のテクノロジーではない。主体と結合した、主体の目的や健康と、幸福や相互是認としっかり結合した工学である。

そのことを確認するために、近代的国家の最初の設計図、〈リヴァイアサン〉構築の冒頭におきた、神学的な、機械論的な主体忘却をいまいちど想起しておきたかったのである。

個我に対置される人為的国家は、ホッブズにおいて、〈契約〉という拘束を蒙った。しかしそれは原点での、出発点での拘束であり、その拘束の実体は個我の自由の放棄、それと生存との交換を内実とする。強権が合理的に自動機械として動くかぎり、それは制約を知らない。内在的な制約はその合理性のみである。すると一つの推論が成り立つ。この合理性によって運動する〈リヴァイアサン〉が、他の〈リヴァイアサン〉と接する時、対峙する時、そこに新たな〈自然状態〉が生じないかと。ここからまた〈リヴァイアサン〉同士の〈恐怖〉に基づいた契約を理論化することもできるかもしれない。

この〈恐怖〉は、国際法成立の一つの背景であったことは確実である。その最初期の代表者、フーゴー・グローティウス（1583～1645年）は、ホッブズの同時代人であり、ホッブズとは少し異なる文脈で、しかし同じように強度の宗教的対立に巻き込まれている。オランダで起こった神学論争の際に寛容な立場に立った彼は逮捕され、パリへの亡命を余儀なくされた。その亡命中に仕上げた仕事代表作であり、また国際法の金字塔となった『戦争と平和の法』（1625年）である。そこでははじめて、合法的、つまり文明的に許容される戦争と、そうではない戦争、野蛮な殺戮とが区別されるが、その根拠となるのは、〈理性の自然法〉であり、それはちょうどホッブズの自然状態と表裏一体の関係にあるように思える。

この戦争法の観念は、領域戦争にあけくれた絶対主義の前半期、およびその後半における海洋支配を巡る長期の大戦争（英蘭戦争など）を背景にしている。そしてそれは結局、ペリーやハリスたちがふりかざす〈万国公法〉へと収斂していく。その原点において、文明、非文明の尺度が戦争に用いられたこと、そして文明的戦争は〈合法的〉であるとされたことは、グローティウスの意図を超えた、大きな影響を後世に及ぼしたように思う（通例は逆側に解釈されることが多いが）。つまりそれは、神学論争に似た文明⇄非文明の両極性を、形成されていく近代国際法における〈自然な〉尺度として持ち込んだことにより、十九世紀的な〈文明イデオロギー〉と〈海洋支配〉の合体を法理として裏打ちするような、そういう隠然たる影響力を持ったように感じるからである。この合体の結果が例えば黒船と不平等条約だった（これは第三章で検証する）。実際にまた、帝国主義やその前身となる植民地主義はおおむねこうした〈文明⇄非・文明〉の二極分化のイデオロギーに動かさ

れていたことが事後的に確認できる。するとさらに推論を働かせ、こうしたイデオロギーの酷薄な結末こそ、二つの大戦ではなかったのかと問いかけることもできる（国際法の限界の問題は、第四章第五節で再び検討する）。

この推論の妥当性はともかくとして、自走するメガ・マシンが複数存在するという現実が近代の基調であった、そのことは直感される。するとやはり理論的な要請として、こうした自走するマシンの最後が〈自然状態〉でしかありえないのかという問いが自然に生じる。この問いこそ、近代的定位が必然的に〈立法〉の理念に辿り着かざるをえない、その必然性を証しているとわたしは考える。したがって、ホッブズのマシンの、まったく新しい統制原理として、〈法〉が注目されることになるのである。その〈法〉は、さいしょ、個我の中に発見された。カントの〈道徳律〉がそれである。そしてそれは、やはり必然的に、リアヴィアサンの統制原理として展開され、やがて〈国家の法による自己拘束〉、つまり〈法治〉の観念を産むことになるのである。

この近代的定位の最後のピース、立法の精神をカントにおいて確認することにしよう。

（本論第四回テキスト終わり）